

筆者はかつて多量飲酒者だったが、約十年前、苦しい状況で思わず祈りの言葉を口にした時、急に世界が明るく開けて感じる一種の神秘体験をし、以来アルコールを全く口にしていない。それ以前にも意志の力で酒を止めようという度か試みたことがあるが、2カ月と続かなかった。だから自分の意志以外の力が働きかけたと思えなかった。

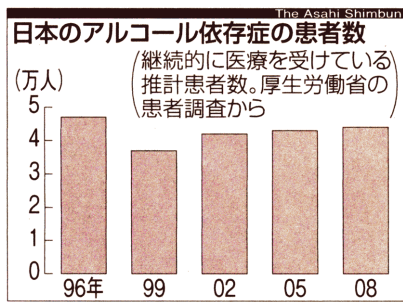
自分の身に起きたことを理解しようと文献に当たろうと出あったのが「依存症と恩寵」(2007年再刊)だ。著者ジェラルド・メイ(40、05年)は米国のクリスチャンの精神科医。ベトナム戦争従軍時には武器の携行を拒否して患者の治療に当たったという。その後臨床を離れ、禅を含む超教派の立場での霊的指導と著作に専念した。

本書の中に一人のアルコール依存症の男性の話が出てく

る。「ある日雑貨屋に行くの道歩きを歩いていったんだ。そしてその歩道のところで、心の平静さを見いだしたんだ」

男性は長年アルコール依存症を患い、その日も他の日と変わりはなかった。けれどもそのシンプルで不思議な瞬間に男性は変えられ、それ以来酒を飲むのを止めたという。

男性自身はこの体験を宗教的な言葉で語らない。しかしメイの臨床経験によれば依存症患者でまれにこうした特別な癒やしが生じる。「神の愛



が奇跡のように私たちを突き抜けることがある」という。

筆者の飲酒癖が精神的に依存症の診断がつくものだったかどうかは分からない。けれどもこの男性の話を読んだ時、自分の身に生じたことがよく分かった気がした。

メイは各種の依存症(酒、薬物、仕事、家族、人間関係など)を、神ならぬものを自分の神としてあがめる偶像崇拜になぞらえ「現代人の聖なる病」と呼ぶ。依存症の癒やしには、薬物や心理的な治療にとどまらず、神の恩寵が必要となる時がある。むしろ、人は依存症の経験を通し、人智を超えた神の愛の恵みに触れることがあると彼は主張する。

心の癒やしは、通常の医療とは別の形で生ずる場合がある。そのことは、患者には希望を、医療者には謙虚さを、もたらすものだろう。

(東北大学教授 坪野吉孝)